

AERONCA

[Japan Flying Association / J F A]

since1953

大利根日和



10月8日、飛行場で秋の味覚、秋刀魚集會が開催されました。飛んだり食べたりの一日でした。活きの良い秋刀魚に炊きたて新米、ジビエ(鹿、猪)も登場。場内はかなり前に育ち盛りを過ぎたであろう、元気な面々が集結。秋刀魚は早々

に売り切れです。こんな風に台風や事故などを案ずること無く、過ごせるのが本来の明るい大利根です。飛行場では安全対策を念入りに行っていますが、利用する皆様のご協力も必要です。これからも大利根を宜しくお願い致します。

TABLE OF CONTENTS

- 「大利根日和」 P1
- 「赤十字飛行隊」 P2~3
- 「支隊紹介、ボランティア・リーダー研修会 参加報告」 P4~5
- 「『地上では平和に安全に暮らしている人々がいる』空を飛ぶ者の責務」セコム(株)航空サービスグループ 三田村 晃 ... P6
- 「低速大迎角状態での飛行安全確保」奥貫 博 P7
- 「JFAサロン」 P8



赤十字飛行隊



高橋 淳 赤十字飛行隊隊長より

仲間の一言を盗みましょう。
なる程 ということがあります。

★★★ 平成29年 防災功労者防災担当大臣表彰 ★★★

昨年の熊本地震では、被災地である熊本支隊がリーダーとなり、和歌山、長野、大阪、岡山、鹿児島支隊と協力して救難飛行活動およびグランド活動を行いました。特に熊本支隊は実際に被災もし、大変な非常時であることから、一刻も早い救援活動が必要と判断し、県、国などに働きかけ救難飛行活動の体制を敷くことに尽力しました。その結果、緊急出動として各支隊が一丸となって被災状況空撮、救援物資の搬送などのフライトと、給水・給油、炊き出し、遠方からの救援にくる方達の道案内のグランド活動などクオリティの高い活動をおこないました。このたび、この活動に対して赤十字飛行隊熊本支隊が表彰されましたのでご報告いたします。



■ 国務大臣内閣府特命担当大臣より表彰



■ 小此木国務大臣と新永隆一熊本支隊長

長野支隊

◆ 平成29年10月14日(土)

『平成29年度 日本赤十字社長野県支部合同災害救護訓練』

8月中旬に参加要請を受け、担当者と物資輸送を想定した訓練を調整していましたが、地元自治体が「騒音」への苦情発生を懸念されたため、着陸場所の調整ができずフライトは中止となりました。よって着陸を伴わない上空からの、想定災害地周辺の被害状況通報の訓練を提案しましたが、こちらも同様の理由で実施できませんでした。そのため当日は、日赤長野県支部のコーディネーターが飛行依頼をする

までにかかるプロセスを確認する訓練となり、電話による飛行依頼のシミュレーションという形での訓練参加となりました。去年は、依頼を受けてから、実施日までの時間がなく、上空視察のみの参加でフライトをしました。これを踏まえ、今年は2カ月ほどの準備期間がありましたが、残念ながら飛行中止の結果となり「騒音」という高いハードルの存在を痛感しました。

参加者：白澤政仁支隊長、寺本弘昭隊員

熊本支隊

◇災害時における捜索救難航空機とドローン使用に関する懇談会開催

9月14日、熊本空港事務所において熊本支隊の呼びかけで、標記懇談会を開催しました。最近各地においてドローンの活用が目立つようになってきました。ドローンはホビーから産業用まで多種多様なものが増えてきていますが、ドローン所有者に対しては、使用方法の周知徹底もされていないのが現状です。このような状況下の中で、災害が発生した場合、ドローンと航空機のニアミスが懸念されます。そこで各団体と安全確保についての意見交換をおこない、ドローンの技術と性能、普及率と使用状況や法律に関すること、航空法などの確認をいたしました。なお、最近では10月5日に大阪(伊丹)空港で、誘導路上をドローンのような飛行体

が飛んでおり、旅客機が着陸をやり直すトラブルが。10月18日には、石川県警のヘリコプターが、ドローンとみられる飛行体とのニアミスもありましたので、フライト時には今まで以上に見張りにご注意ください。

●出席者

熊本県ドローン技術振興協会、大阪航空局熊本空港事務所、陸上自衛隊(在高遊原分屯地所在部隊)熊本県防災消防航空センター、熊本県警航空隊、熊本県建設コンサルタント協会、熊本県赤十字病院救命救急センター、熊本県防災課



■懇談会の様子



■今回発見されたドローンとみられる飛行体の高度イメージ(読売新聞より転載)

山形支隊

◇平成29年9月10日(日)庄内空港『空の日フェスタ』

◇平成29年9月24日(日)山形空港『空の日フェスタ』 ※両日とも機体展示と展示飛行を実施

展示飛行は錦織支隊長がローバスを3回。庄内空港では本田隊員が山形県航空協会のフライトシミュレーターを支援。山形空港では安孫子隊員が機体展示の地上支援と山形県航空協会のフライトシミュレーターを支援、本田学隊員もフライトシミュレーターを支援した。

機 体：JA4196 ソカタTB9
時 間：0+21(庄内空港)、0+17(山形空港)
操 縦：錦織靖
地上支援：安孫子善一、本田学



■庄内空港ローバス



■山形空港で(安孫子善一隊員、錦織靖山形支隊長、本田学隊員)

:: 赤十字飛行隊支隊紹介 ::

毎回、全国の各支隊を紹介しています。

兵庫支隊

文・写真／大川 博正

赤十字飛行隊兵庫支隊は、兵庫県の南西部に位置しロビンソンR44を格納駐機し常に緊急出動出来る体制を整えています。支隊近くには世界遺産の国宝姫路城や手延べそうめん揖保乃糸、ヒガシマル醤油などがあり有名で大変のどかな所です。

主に兵庫県南部を中心に飛行訓練も兼ねて大阪八尾空港から神戸、姫路までの海岸線を月に2、3回程度飛行することが多いですが、大阪湾上空では関西、伊丹、神戸の3空港を利用する機体も多く、海上では明石海峡付近で海難事故が多発し船舶の往来が大変多い所です。

神戸上空を飛行する時に思うのは、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災（震度7.2、死者6,434人、負傷者43,792人、全半壊約25万棟）から23年が経ちま

すが、当時地震発生直前の確率は00.2～8%でした。発生の確率値が小さい様に見えても決して地震が発生しないことを意味しません。現在では大きな被害を受けた神戸市街は復興が進み平常を取り戻しています。文部科学省所官「地震調査研究推進本部」は、南海トラフが発生するM8以上の地震の確率を今後30年以内で70%程度としています。最悪の場合全国で最大430万人が避難所へ、3日間で3,200万食、飲料水4,800万リットル、毛布520万枚が不足すると想定されています。

私は兵庫支隊長として、過去の災害の経験を活かし常に全国の赤十字飛行隊の活動にご協力出来るように努めて参りたいと思っています。



■支隊格納庫



■支隊近くの国宝姫路城



■現在の神戸市街



平成29年度 赤十字ボランティア・リーダー研修会 参加報告

赤十字飛行隊運営委員 奥貫 博

H29.8.26-28の3日間、東京代々木において、平成29年度 赤十字ボランティア・リーダー研修会が開催されました。この研修会は、これまでに例のない、赤十字の地域・特殊・青年奉仕団合同研修としての開催となるもので、本社直轄の飛行奉仕団・赤十字飛行隊としても、初参加となるものです。

参加者は、赤十字本社13名、研修者61名、オブザーバー7名で、赤十字飛行隊からは、並河大阪支隊長、奥貫運営委員が参加。また、オブザーバーとして、初日に本部の加藤が参加しました。

研修会は、参加者を1グループあたり7～8名として、地域奉仕団員と特殊奉仕団員を混在させ、計8グループが、それぞれにグループ討議を行った後、その結果を発表し合う形で実施されました。

3日間にわたる研修で、その内容は多岐にわたりますので、要点のみを以下に報告します。

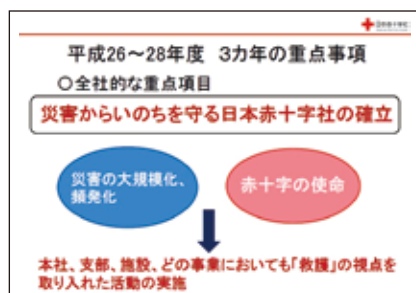
●この研修会の目的

赤十字活動についての理解を深め、赤十字運動推進の自覚と資質を向上させる。

赤十字マインドを持ったボランティアとして、災害マネジメントサイクルの中で、奉仕団としてのニーズを捉えた活動を行う力を養う。

●日本赤十字社事業の重点事項

下の図にありますように、災害から命を守ることが最重要課題になります。赤十字飛行隊においても、災害対応としての救護の視点とそれに沿った活動の展開が必要になります。



●活動はニーズの把握から

・ニーズに応じた活動の展開、グループ力・ネットワーク力

の強化、ボランティア参画領域の拡大

- ・想定外を無くす努力。災害対応の備えと活動は、まずは想定することの重要性の認識から
- ・常に、防災・減災の視点を持つことが大切
- ・他の奉仕団の存在や活動を知り、必要時に調整や協働活動が出来るような備え
- ・奉仕活動の敵は、利己心、無関心、認識不足、想像力の欠如
- ・赤十字の基本原則に基づく意識と活動時における判断基準
- ・災害とは、地震や津波、噴火等そのものではなく、それら事象の結果として発生する被害を指す
- ・人々のいのちや健康、財産などに負の影響が生じることが災害
- ・地震や津波等の外力を止めることは不可能でも、防災力を高め、災害の被害を軽減することは可能

●赤十字飛行奉仕団(赤十字飛行隊)の現状

赤十字飛行奉仕団(赤十字飛行隊)の場合、ボランティア活動の条件としての、自発性、無償性、公共性、社会性、福祉性は、赤十字飛行奉仕団規定に明記され、全ての隊員に徹底されています。

実際の活動については、ニーズの確認から、そのニーズに応える活動の展開までが、各支隊によって実践されていますが、隊員の役割分担、活動に必要な訓練・練習の準備等は、常に必要です。

●赤十字飛行奉仕団(赤十字飛行隊)の奉仕活動実施時の課題

赤十字飛行隊の、ニーズに応える出動は、その活動が安全に行われ、困っている人達を助けることが出来るところまでつながっていなければなりません。そのためには、常に地上との連携が必要になりますが、以下の2点はいずれも、その実行の支障となるもので、改めて実現の必要性が認識されました。

1. 航空機と地上の連絡用の、赤十字活動用のVHF周波数が無く任務達成及びその際の安全確保の面に問題があるので、赤十字活動用VHF周波数取得の、日本赤十字社への申し入れを実施中。
2. 被災地に搬入した食料や物資等の物資は、地上のボランティア組織により、扱っていただく必要がありますが、その連携体制が不十分のため、協力体制について協定を結ぶ等の方法で個々に対処中。

地上では平和に安全に暮らしている人々がいる…

～空を飛ぶ者の責務～

文・写真

三田村 晃

セコム(株)
航空サービスグループ

今回縁がありエアロンカに投稿する機会をいただきましたので、若輩者ではありますが、飛行にあたり常に意識していることを述べたいと思います。

航空の仕事に携わるようになってから常に「飛ぶこと・飛ばすこと」以上に「安全」を強く意識して日々の業務をしています。重力に逆らって飛行している我々がひとたび事故を起こすとそれは人命にかかわる取り返しのつかない状況になります。これまでにすごく身近な人が事故により命を落とされるという辛い経験を何回もしておりますが、そのたびに「事故は起こしてはいけない、万が一事故を起こしたとしても人の命を奪ってはいけない。勿論、搭乗者も自分も命を落とすことがあってはいけない。」と決意を新たにしております。

操縦教育証明取得のための勉強をしていた頃に私の胸に深く刻み込まれた『地上では平和に安全に暮らしている人々がいる。その人たちの生命と財産を奪うようなことがあってはならない。』の言葉が、以来私の操

縦士としての責務の骨幹となっています。

1999年、航空自衛隊の入間基地を離陸したT-33が入間川河川敷に墜落した事故がありました。墜落の直前まで住宅地や学校を避けるために操縦を続けた結果、脱出が遅れ、2名の操縦士が殉職されました。2名のベテラン操縦士は地上に被害を及ぼしましたが、地上で平和に暮らしている人々の生命は自分たちの命と引き換えに奪わなかった。(自分達の命も最後まで諦めてはいなかったはず)

地上では平和に安全に暮らしている人々がいる。少なくともその人達の生命を脅かさない事が空を飛ぶ者としての責務だと考えます。この責務を果たすために飛行に際しては、油断することなく最大限の努力を継続していくことが極めて重要であると常に意識しております。

これからも安全を確保できるよう日々精進していきたいと思います。

みたむら・あきら

《プロフィール》 陸上自衛隊で操縦士として20年間勤務し、現在セコム(株)航空サービスグループにて操縦士として勤務しています。自衛隊では操縦教官として7年勤務しその際に、高橋淳 赤十字飛行隊長の講話を拝聴し深く心に残っています。



低速大迎角状態での飛行安全確保

奥貫 博

前号に掲載の、調布飛行場墜落事故の推定原因は、「最大離陸重量を超過した状態において、標準よりも低い速度で離陸し、過度な機首上げ姿勢の継続したことにより、失速に至って墜落」というものです。

この中の、最大離陸重量と標準離陸速度については、飛行規程の内容の遵守により直ちに実行できますが、低い速度の過度な機首上げ飛行と失速の件は、その速度領域の飛行についての、知識と技量の再確認が必要です。

事故報告では、また、必要パワーが最小となる速度以下では、機首を引き上げると、抗力が増大して、高度維持のためにパワーが必要な、バックサイドの飛行になるとの注意喚起もあります。

操縦士の技能証明取得前の、操縦訓練の段階において、この速度領域の飛行は、スローフライトとして教育され、必要な知識と技量を身に付けていますが、昨年、そのスローフライト訓練の実施内容について、米国FAAはSAFO (Safety Alert for Operator)を発行し、実施基準の見直しを行っています。

その背景としては、低速領域での飛行中における不適切な操縦、あるいは操縦の喪失が、米国と世界のジェネラルアビエーション死亡事故の最大の原因となっていることがあげられています。そのため、米国のNTSB(国家運輸安全委員会)は、2016年の重点施策として、ジェネラルアビエーションの飛行中の不適切な操縦の防止の必要性を記載し、それを受けたFAAは、スローフライト操縦のための評価基準を改訂し、また、関連するガイダンスを制定したものです。

その内容は、従来の、実施速度を定めて行うスローフライトを、実際の搭乗機体での失速兆候、あるいは失速警報作動速度を基準として実施するものに改め、失速に近い速度領域での飛行の技量が、安全かつ確実に身に付くようにするものです。

スローフライト訓練の目的は、失速警報の作動領域に近い速度領域の飛行特性を理解し、必要馬力曲線のバックサイドの側の、パワー操作の必要性、加速反応の劣化、操



■低速大迎角の飛行には特有の注意が必要

縦応答の劣化、水平線の見え方の変化、音の変化等を把握して、安全を確保することにあります。

改訂されたFAAのスローフライトでは、フラップ上げ、下げ等の飛行形態を確立した後、まずは水平直線飛行で減速させ、失速警報の作動速度を確認します。次に、失速警報の作動を止めるため、わずかにピッチダウンし、高度維持のためにパワーを調整し、失速警報の作動が止まる速度を確認します。例えば、最初の失速警報作動速度が50Ktで、その後、わずかにピッチダウンし、高度を維持した状態の52Ktで失速警報の作動が停止したとします。この場合は52Ktが、スローフライト実施の基準速度になります。以降、必要に応じてピッチとパワーを調整し、基準速度+10/-0Kt (例の場合は52-62Kt) の速度を維持することで、重量や密度高度等に関係なく、スローフライのための迎え角を得ることができ、失速警報が作動しない最小速度で、水平直線、上昇、旋回、降下飛行を行うことにより、スローフライト習得の目的を達成することが出来るとされています。尚、FAAは、飛行中、失速警報を無視してはいけなくと警告しています。フルストール練習の場合を除き、失速警報作動の場合は、直ちに失速回復の手順を実行する必要があります。

スローフライトの練習は、技能証明のための操縦訓練段階で終わりではありません。

十分な経験のある方も、現在搭乗の機体において、改めてこの新しいFAAのスローフライトの内容を練習することにより、低速大迎角の飛行特性を再確認し、飛行安全の確保につなげることが必要です。



●年間スケジュール

Schedule

日 時	内 容	会 場
11月3日(金・祝)	高橋淳トークイベント	調布飛行場 IBEX AVIATIONフライングクラブ
11月4日(土)	赤十字飛行隊集合訓練 赤十字飛行隊、静岡県警察航空隊	富士川滑空場
11月5日(日)	平成29年度八丈町・青ヶ島村総合防災訓練医薬品搬送訓練	群馬支隊、赤城HP～八丈島
11月18日(土)	赤十字飛行隊全国支隊長研修	日本赤十字社 本社101会議室
11月23日(木・祝)	立川基地防災航空祭 3機展示	陸上自衛隊立川駐屯地
12月7日(木)	北宇都宮駐屯地連絡会 本部参加	陸上自衛隊北宇都宮駐屯地
12月9日(土)	航空安全講習会	東京都調布飛行場ターミナル会議室
12月17日(日)	静岡市消防航空隊、静岡市日本平消防署、 静岡市清水消防団合同訓練	三保飛行場
1月中(土)	航空安全講習会	茨城県内にて開催予定

●日本飛行連盟の飛行場

Airport

大利根飛行場

茨城県稲敷郡河内町・利根川河川敷

大利根は様々な機種の宝庫。特にモグラ(モーターグライダー)が有名ですが人種のモグラも来ます。*モデル、グラビアアイドル*が撮影にやってきます。

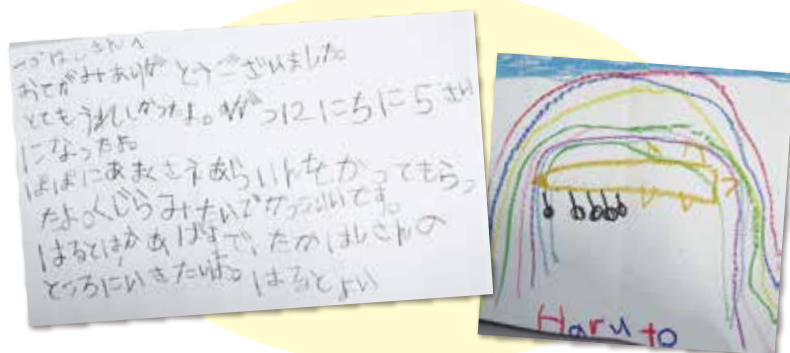
三保飛行場

静岡県静岡市清水区三保・三保半島

今年は地元消防署や消防団、消防ヘリ合同の訓練がおこなわれる予定です。誰が来ても良いようにお掃除部隊を考慮中です。

★ファンレター頂きました～😊

そのお便りは、なんと年齢差90才!!。いつもは年齢差20-30才位なのですが、今回は5才の男の子からで、とっても可愛いお手紙でした。高橋隊長を紹介したテレビを見ていっぺんにファンになったそうです。隊長も早速返信したところ、お母様と坊やからメッセージが届きましたので併せてご紹介します。



高橋 様

先日はご多忙の中、ご丁寧にお返事を頂き真に有り難うございました。毎日机の上にハガキを飾って嬉しそうにながめるのが日課となっております。まさかお返事が頂けるなんて私も嬉しくて心より感謝しております。「パイロットになるにはね!ちゃんとからだをつくることと、めが大切だから、ママちゃんとごはん食べないとね!」と言っています。ますますパイロットへのあこがれが強くなりどこへ行っても飛行機を探せば「ママ見つけた!飛行機!」と教えてくれます。子供に希望やあこがれを作ってやれることは親としてすごく嬉しいことです。心より感謝しております。ひらがなが少し上達したでしょうか?読みにくいですけどまたお手紙を書きましたので読んでやっていただけると嬉しいです。

京都市在住 YK